

2024年度国公立大志願状況

河合塾

2024/2/21

国公立大の確定志願者数が判明した。総志願者数は423,256人、志願倍率は4.3倍であった。全体的には昨年と大きく変わらない動向となった。以下、各国公立大が公表した出願状況について概況をまとめた。

全体概況

前期・後期日程では前年並みの志願者数集まる

国公立大一般選抜の総志願者数は423,256人と昨年から110人増（前年比100%）、募集人員に対する志願倍率は昨年同様の4.3倍となった（以下、倍率はとくに記載のない限り全て志願倍率）＜図表1＞。

18歳人口と大学入学共通テスト（以降、共通テスト）の受験者数がいずれも前年比97%と減少したことと比較すれば、国公立大の人気は上昇したといえるだろう。

国公立大入試の中心となる前期日程の志願者数は、232,342人（前年比100%）となった。国立大、公立大に分けてみても、国立大で前年比101%、公立大で同100%と両者に大きな差はない。

後期日程でも今年は前年比100%と志願者数に大きな変化はなかった。なお、公立大で実施される中期日程は前年比98%とやや減少、倍率は0.1ポイントダウンした。

新課程入試を翌年に控え、今年は志望を下げる、科目負担が軽い私立大に出願校を絞り込むといった動きが予想されたが、そういった動きはみられなかった。要因には共通テストの平均点が前年からややアップしたことから当初の予定通りの出願がしやすかったことが挙げられるだろう。

注意したい隔年現象

志願者数が昨年と大きく変わらなかったことで、例年以上に露わになったのが隔年現象である。志願者が増加した大学・学部は昨年は減少していたケースが散見されるが、その増減幅が大きい大学が見られる。前期日程で昨年と今年で前年比が大きく変化した例を挙げると、北見工業大（53%→188%）、福島県立医科大学（155%→76%）、横浜国立大（136%→88%）、富山大（118%→75%）、福井大（62%→133%）、滋賀医科大学（51%→137%）、鳥取大（85%→120%）、山口大（135%→72%）、香川大（67%→121%）などがある。出願の際に前年入試の倍率のみに注目しないよう注意したい。

第1段階選抜の不合格者は増加

文部科学省の発表によると、前期日程における第1段階選抜の実施大学・学部数は35大学55学部だった。予告していた68大学178学部のうち約半数の大学、学部でみると約3割で実施したことになる。第1段階選抜の不合格者数は4,413人で、昨年から約600人増加した。

詳細は後ほど触れるが、旧帝大を中心とした難関大で前年比101%と志願者がやや増加しており、受験生の難関大への積極的な出願が、第1段階選抜不合格者数の増加の要因とみる。

＜図表1＞国公立大志願状況

区分	日程	募集人員（A）		志願者数（B）				志願倍率（B/A）	
		23年度	24年度	23年度	24年度	前年差	前年比	23年度	24年度
国立大学	前期	63,638	63,695	176,447	177,519	+1,072	101%	2.8	2.8
	後期	12,667	12,644	121,822	122,193	+371	100%	9.6	9.7
	計	76,305	76,339	298,269	299,712	+1,443	100%	3.9	3.9
公立大学	前期	16,584	16,791	54,968	54,823	-145	100%	3.3	3.3
	後期	3,388	3,348	38,246	37,653	-593	98%	11.3	11.2
	中期	2,428	2,400	31,663	31,068	-595	98%	13.0	12.9
	計	22,400	22,539	124,877	123,544	-1,333	99%	5.6	5.5
国公立大学計	前期	80,222	80,486	231,415	232,342	+927	100%	2.9	2.9
	後期	16,055	15,992	160,068	159,846	-222	100%	10.0	10.0
	中期	2,428	2,400	31,663	31,068	-595	98%	13.0	12.9
	計	98,705	98,878	423,146	423,256	+110	100%	4.3	4.3

※河合塾調べ

※独自日程で実施する大学は表に含まない

地区別－北陸でやや減少幅大

＜図表2＞は前期日程の地区別の状況である。前年比でみると100%前後と前年との変化が小さい地区が多いが、北関東、北陸、九州では志願者の増減幅がやや大きかった。

このうち北陸地区では前年比90%と減少幅がやや大きくなった。能登半島地震の被害が大きい地域であることと無縁ではないであろう。受験の際の宿泊先の確保、入学後の住宅事情がはっきりしないなか、他地区からは出願しにくかったとみる。ただし、志願者数は金沢大（前年比93%）、富山大（同75%）と必ずしも被災地に近い大学で減少率が高くなっているわけではなく、前年の反動や募集単位の変更の影響の方が大きいようにみえる。

九州地区では志願者が1千人以上増加した。地区内23大学中14大学で志願者増となった。なかでも北九州市立大（前年比129%）、長崎大（同126%）などで大きく増加した、両大学とも前年志願者が減少していた大学であるが、長崎大で志願者が3千人を超えたのは2004年度以来となる。

＜図表2＞ 国公立大（前期日程） 地区別志願状況

地区	23年度	24年度	前年差	前年比
北海道	11,231	11,203	-28	100%
東北	17,620	17,255	-365	98%
北関東	12,321	12,757	+436	104%
南関東	48,258	48,578	+320	101%
甲信越	10,545	10,491	-54	99%
東海	20,993	20,928	-65	100%
北陸	10,253	9,267	-986	90%
近畿	40,218	40,860	+642	102%
中国	21,042	20,426	-616	97%
四国	9,062	9,364	+302	103%
九州	29,872	31,213	+1,341	104%

※河合塾調べ

※北関東：茨城・栃木・群馬 南関東：埼玉・千葉・東京・神奈川

系統別の状況

「文・人文」「理」「総合・環境・情報・人間」で志願者増

＜図表3＞は国公立大の前期日程の志願状況を、学部系統別に集計したものである。文系では「文・人文」で前年比105%と志願者が増加した。ほか「経済・経営・商」の志願者が前年を上回ったものの、「社会・国際」「法・政治」でやや減少した。

理系では「理」で志願者増加、「工」で前年並み、「農」では減少となった。また「医・歯・薬・保健」「生活科学」はいずれも前年並みとなった。「総合・環境・情報・人間」は前年比108%と全系統のなかで増加率が最も高くなった。

以下に、主な系統について確認していく。なお、文中の志願者数・前年比はとくに記載がない場合、前期日程を表す。

〔文・人文学系〕

系統全体の志願者数は前年比105%と文系の系統の中で増加率が最も高くなった。分野別にみると「外国語」など国際系の分野で増加が目立った。この分野は新型コロナ流行以降、不人気となってい

たが、変化の兆しがみえてきた。ただし、志願者数自体は一昨年と比べればまだ少なく、コロナ前に戻るのはまだ先といえそうである。

各分野で倍率が最も上昇したのは、「日本文学」である。ただし、昨年は志願者が大きく減少した分野であり、こちらも一昨年ほどには志願者数が戻っていない大学が散見される。

〔社会科学系（社会・国際、法・政治、経済・経営・商）〕

「社会・国際」系の志願者数は前年比98%、5年連続の減少となる。ただし、分野により動向は異なり、「国際関係」分野では前年比105%と増加した。昨年共通テスト数学の科目数増で志願者を大きく減らした東京外国語大（国際社会、国際日本）で前年比115%となったほか、千葉大（国際教養）、金沢大（人間社会-国際）、九州大（共創）などでも志願者が増加した。

「法・政治」系の志願者数は前年比97%と、こちらも減少した。「法」分野で志願者は前年並み、「政治・行政」分野で前年比86%と減少した。大学群に分けてみると、旧帝大を中心とした難関10大学では前年比99%、その他の大学は同96%となった。

大学別にみると、一橋大（法）、金沢大（人間社会-法）、京都大（法）、神戸大（法）では志願者が前年から1割以上増加した。志願者が減少したのは、北海道大（法）、東北大（法）、名古屋大（法）、大阪大（法）などである。増加大も減少大も多くは前年の反動とみられ、数年の志願者数推移をみると、隔年現象を起こしている例もある。出願校決定の際には、前年の倍率にこだわりすぎないよう注意したい。

「経済・経営・商」学系では、志願者数は前年比101%だった。系統全体では大きな変動はないものの、個々の大学でみると、こちらも前年の反動による志願者数の変化が各所にみられた。志願者数が大きく変動した大学をみると、横浜国立大（経済）前年比272%→61%、一橋大（商）同83%→116%、名古屋大（経済）同75%→119%、広島大（経済（昼間））同137%→84%、山口大（経済）同142%→67%などとなっている（前年比はいずれも23年度→24年度）。

〔教育学系（教員養成課程、総合科学課程）〕

教育学系全体の志願者数は前年比98%となった。教員養成課程では前年比99%、総合科学課程で同95%となった。教育学系の志願者数は年々減少しているが、ここ2年は、減少は小幅にとどまる。模試時には不人気であったが、最終的には2年とも減少率は小さくなった。ほぼ全都道府県に大学が設置されていること、他系統に比べ入試難易度が高くないことなどが出願しやすいている。なお今春、倍率が2.0倍未満の低倍率の募集区分は全系統で500区分にのぼるが、そのうち約4割を教員養成系が占めており、競争緩和が進む系統といえる。

〔自然科学系（理、工、農）〕

「理」学系では前年比103%と志願者が増加した。分野別では「数学・数理情報」「物理」分野などで志願者が増加した。

主な大学の動向を確認すると、近畿の難関3大学（京都大、大阪大、神戸大）でいずれも志願者が増加した。とくに大阪大、神戸大では前年から1割以上増加した。横浜国立大（理工）は昨年志願者が大幅に増加したが、今年は前年比95%と減少、一方、横浜市立大（理）では今年は前年比197%と2倍近く増加した。富山大（理）では志願者が半減した。今春1学科6プログラムに改組、募集は学部一括となった。入試科目の異なる4

＜図表 3＞ 国公立大（前期日程） 学部系統別の志願状況

系統	募集人員（A）		志願者数（B）				志願倍率(B/A)	
	23年度	24年度	23年度	24年度	前年差	前年比	23年度	24年度
文・人文	7,168	7,160	19,061	19,930	+869	105%	2.7	2.8
社会・国際	4,014	4,029	11,315	11,034	-281	98%	2.8	2.7
法・政治	4,139	4,073	11,971	11,608	-363	97%	2.9	2.8
経済・経営・商	8,185	8,348	25,478	25,700	+222	101%	3.1	3.1
教育－教員養成課程	7,014	6,969	16,467	16,241	-226	99%	2.3	2.3
教育－総合科学課程	851	856	2,102	1,991	-111	95%	2.5	2.3
理	5,042	5,075	14,159	14,601	+442	103%	2.8	2.9
工	22,767	22,800	61,322	61,347	+25	100%	2.7	2.7
農	5,479	5,375	16,175	15,819	-356	98%	3.0	2.9
医・歯・薬・保健	10,751	10,812	37,006	36,962	-44	100%	3.4	3.4
医	3,584	3,573	15,960	15,973	+13	100%	4.5	4.5
歯	453	452	1,769	1,879	+110	106%	3.9	4.2
薬	816	809	3,141	3,111	-30	99%	3.8	3.8
看護	3,990	4,038	10,281	10,322	+41	100%	2.6	2.6
医療技術・他	1,908	1,940	5,855	5,677	-178	97%	3.1	2.9
生活科学	792	790	2,349	2,345	-4	100%	3.0	3.0
芸術・スポーツ科学	1,547	1,560	6,881	7,048	+167	102%	4.4	4.5
総合・環境・情報・人間	2,473	2,639	7,129	7,716	+587	108%	2.9	2.9
国公立 計	80,222	80,486	231,415	232,342	+927	100%	2.9	2.9

※河合塾調べ

パターンで募集したが、入学時に配属が未定の募集を受験生は避けたようである。

「工」学系では志願者数は前年比100%だった。難関大では東北大、名古屋大、京都大で志願者の増加が目立った。分野別では、「電気・電子」「応用化学」で志願者が増加した一方、「通信・情報」「生物工・生命工」などで減少した。「通信・情報」分野では入学定員が増加していることもあり、倍率は3.4→3.1倍にダウンした。千葉大（情報・データサイエンス）は前身となる工学部情報工学科の前年志願者と比較しおよそ1.5倍の志願者が集まったが、募集人員は1.8倍に増加したため、倍率は5.3→4.2倍にダウンした。

「農」学系では前年比98%、一昨年並みの志願者数に戻った。とくに増加率が高いのは「酪農・畜産」（前年比114%）、「獣医」（同108%）であった。「酪農・畜産」では鹿児島大（共同獣医）に畜産学科が新設された影響が大きい。なお、近隣の宮崎大（農・畜産草地科学）では志願者が半減した。「獣医」では鹿児島大の倍率がbパターン（2次重視）で24.5倍、aパターン（共通テスト重視）で2.1倍と大きく差が開いた。2次挽回を狙う受験生がbパターンに集まったとみるが、両パターンの倍率差は昨年より広がっており、次年度も注意が必要な募集区分である。

〔医療系（医・歯・薬・保健）〕

医療系全体の志願者数は、前年比100%となった。「歯」では前年比106%と志願者が増加、「医」「薬」「看護」では前年並みとなった。

「医」では昨年まで3年連続で志願者が増加しており、今春もその人気を保った形だ。また、旧帝大を中心とする難関大8大学の志願者は前年比105%と増加を続けている。動きが目立つ大学を挙げていくと、愛媛大では昨年まで2年連続で大きく志願者が

減少していた反動からか、今春は前年比234%と大幅に増加した。岐阜大では第1段階選抜の予告倍率を9→3倍に変更した。志願者数は前年比34%と大きく減少した。ただし倍率は3倍を超えたため第1段階選抜が実施された。奈良県立医科大は2次の学科試験を小論文に変更した。対策の立てづらさが受験生に敬遠され、志願者数は前年比25%とこちらも大きく減少した。

「薬」では前期日程は前年並みの志願者数であったが、中期日程では前年比93%と減少が目立った。対象の4大学はいずれも中期日程のみ募集する大学であるが、岐阜薬科大で志願者が増加した以外は、静岡県立大（前年比76%）、名古屋市立大（同84%）、山陽小野田市立山口東京理科大（同81%）と減少率が高くなった。

「看護」も前年並みの志願者数になったが、競争緩和が進む分野である。倍率も教育系に次いで低い。個別の大学でみると、すでに過去数年倍率が2倍未満で推移している大学もみられる。

〔その他〕

「総合・環境・情報・人間」の志願者は前年比108%と増加した。「総合」分野では2020年度からの志願者前年比は149%→45%→143%→64%→124%と、隔年現象を繰り返している。

「情報」分野も前年比107%と志願者が集まった。ただし、学部の新設による効果が大きく、募集人員は前年比117%と志願者以上に増加しているため、倍率は3.0→2.7倍にダウンした。新設2年目の一橋大（ソーシャル・データサイエンス）、和歌山大（社会インフォマティクス）では志願者が減少した。今春新設の下関市立大（データサイエンス）、周南公立大（情報科学）では中期日程も実施する。下関市立大の中期日程では倍率が42.4倍になるなど、多くの志願者が集まった。

難関国立大の状況

10大学中7大学で志願者増

＜図表4＞は旧帝大を中心とした難関10大学の志願状況を前期日程・後期日程でまとめたものである。

難関10大学全体では、前期日程の志願者数は56,326人（前年比101%）となった。大学別にみると、東北大、東京大、一橋大、名古屋大、京都大、神戸大、九州大の7大学で志願者数が昨年を上回った。以下、難関10大学の状況を個別にみていく。

＜図表4＞ 国立難関10大学の志願状況

大学名	前期日程				後期日程			
	23年度	24年度	前年差	前年比	23年度	24年度	前年差	前年比
北海道	5,284	5,196	-88	98%	4,524	4,286	-238	95%
東北	4,239	4,423	+184	104%	1,007	1,279	+272	127%
東京	9,306	9,432	+126	101%	—	—	—	—
東京工業	4,167	3,982	-185	96%	—	—	—	—
一橋	2,641	2,721	+80	103%	1,739	1,683	-56	97%
名古屋	4,258	4,359	+101	102%	76	90	+14	118%
京都	7,417	7,800	+383	105%	410	406	-4	99%
大阪	7,398	7,196	-202	97%	—	—	—	—
神戸	5,885	6,110	+225	104%	4,020	4,046	+26	101%
九州	5,067	5,107	+40	101%	2,218	2,433	+215	110%
難関10計	55,662	56,326	+664	101%	13,994	14,223	+229	102%
その他大計	175,753	176,016	+263	100%	146,074	145,623	-451	100%

※河合塾調べ

※「その他大計」は難関10大を除いた国公立大計

〔東北大〕

前期日程の志願者数は前年比104%、3年ぶりの志願者増となった。大きく志願者を増やした学部・学科は経済（前年比117%）、工（同110%）、医-医（同122%）、薬（同116%）などである。工学部は入学定員増（前年比105%）以上の増加率となり、倍率は2.4→2.6倍に上昇した。医学科は第1段階選抜の予告倍率を3.0→3.5倍に変更したことも出願を後押ししたとみる。

志願者が減少したのは、教育、法、農、歯学部などである。法学部は4年連続の志願者減となった。農学部は、2020年度以降、隔年現象を繰り返しており、今春は減少の年にあたった。

後期日程は経済、理の2学部が実施するが、大学全体で志願者は前年比127%と大きく増加した。昨年は前年比76%と大きく減少しており、その反動が大きく出た形だ。

〔東京大学〕

大学全体の志願者数は前年比101%となった。文科類では、文科一類・二類で志願者減、三類で増加した。文科一類では2年連続の志願者減となった。なお、文科一類・二類では第1段階選抜は実施されなかった。この2科類とともに第1段階選抜が実施されなかったのは、2016年度以来8年ぶりとなる。

理科類では、理科一類で志願者が前年比109%と大きく増加した。一方、理科二類では志願者は減少、一昨年並みの志願者数となった。この2科類は昨年は一類で志願者減、二類で増となっており、来年も今年の反動に注意したい。理科三類では志願者数は416人、3年連続で4百人を超えた。

〔北海道大学〕

前期日程の志願者数は前年比98%とやや減少した。学部別にみると志願者は総合入試文系、文、教育、法、歯学部で減少が目立った。昨年志願者が増加していた学部もあるものの、教育学部では3年連続の志願者減となった。

一方、志願者が増加したのは経済学部（前年比105%）である。法学部と経済学部は2020年度から隔年現象を起こしており、今年は経済学部で志願者増、法学部で志願者減（前年比90%）となった。

総合入試理系では工学部の入学定員増に伴い、募集人員が50名増（前年比105%）となった。志願者は増加したものの前年比102%にとどまった。

医療系では全国的には人気の歯学部で前年比83%と志願者の減少が目立った。また医学部保健学科でも前年比91%と減少した。作業療法学専攻は近年大幅な志願者の増減を繰り返している。今春の志願者は前年比41%であり、来年度は志願者が大幅に増加する可能性がある。

後期日程では、志願者が前年比95%となった。教育、法、工、農学部など昨年志願者が増加していた学部で減少した。ただし、文学部は3年連続、理学部は4年連続の志願者増となった。

〔東京工業大学〕

大学全体の志願者数は前年比96%と減少した。昨年は前年比110%と大きく志願者を増加させていたため、警戒されたようである。

学院別にみると、物質理工学院を除く5学院で志願者が減少した。なかでも、情報理工学院で志願者は2百人以上減少した（前年比75%）。情報理工学院では入学定員増により一般選抜の募集人員も増員されたため、倍率は昨年の9.9倍から5.7倍へ一気にダウンした。ただし、それでも他学院との差が縮まっただけで、全学院で最も高倍率であることに変わりない。

志願者が増加した物質理工学院（前年比116%）は、総合型選抜への募集人員シフトにより一般選抜では減員となっていた。このため倍率は2.5→3.3倍に上昇した。同様に、生命理工、環境・社会理工の2学院も学校推薦型、総合型選抜の拡大で一般選抜の募集人員が縮小している。そのため志願者は両学院とも前年比97%と減少したものの、倍率は生命理工学院が2.3→2.9倍、環境・社会理工学院が4.5→5.0倍といずれも上昇した。

〔一橋大学〕

前期日程の志願者数は前年比103%と増加した。志願者が増加したのは、法、経済、商学部である。このうち法、商学部は前年から1割以上増加した。昨年は志願者数が大幅に減少しており、反動が大きくなった。経済学部は2年連続の志願者増となった。

志願者が減少したのは社会、ソーシャル・データサイエンスの2学部である。新設2年目のソーシャル・データサイエンス学部では前年比62%と志願者は大きく減少した。昨年の倍率は6.1倍と学内で飛びぬけて高く、今春は敬遠された形である。

後期日程は経済、ソーシャル・データサイエンスの2学部で実施する。昨年志願者が減少した経済学部では今春は前年比105%と増加した。ソーシャル・データサイエンス学部では志願者は前年比84%と減少したが、倍率は今年も20倍を超えた。

〔名古屋大学〕

前期日程の志願者数は前年比102%となった。昨年、ここ10年で最少となっていた志願者数は増加に転じた。学部別にみると、経済（前年比119%）、工（同107%）、医（同108%）で志願者が増加した。一方、志願者が減少した学部には文（3年連続）、法（2年連続）といった学部もみられる。

医学科では2年連続の志願者増となった。地域枠では志願者が減少したものの、一般枠では昨年から1割増となった。保健学科では、看護学専攻の志願者が前年比132%と大きく増加したのが目を引く。

倍率に目を向けると、文学部で1.8倍、工-エネルギー理工で1.8倍、農-生物環境科学で1.5倍と3区分で2倍未満となった。

後期日程は医学科のみ実施する。地域枠から一般枠に変わって2年目を迎え、志願者は昨年の76人から90人にさらに増加した。旧帝大の医学科で唯一、後期日程を実施することから、高成績層が集まったことが予想される。

〔京都大学〕

前期日程の志願者数は105%と増加した。3年連続の志願者増である。医、薬学部を除くすべての学部で志願者が増加したほか、経済、工、農、総合人間の4学部では2019年度以降で最大の志願者数となった。工学部では合否判定の際、共通テストの成績は英語・国語・地歴公民のみを利用する。今年は国語の平均点がアップしていたことから、出願しやすかったものとみる。なお、今春より工業化学科から名称変更する理工化学科の志願者は、2割以上増加した。

理学部では今春から第1段階選抜の実施方法を「得点率で概ね70%以上」から「募集人員の3倍」へ変更した。とくに影響はみられず志願者は前年比103%となった。倍率は3倍を超えておらず、第1段階選抜は実施されなかった模様である。

法学部の特色入試は後期日程での実施は今年が最後となる。志願者は406人（前年比99%）と、昨年、前年比114%と大きく増加した志願者数をキープした。例年、東京大、京都大の前期日程との併願者が大部分を占めており、今年も厳しい入試が見込まれる。

〔大阪大学〕

大学全体の志願者数は前年比97%となった。2年連続の志願者減となる。学部別にみると、文系学部では外国語学部を除き、いずれも減少した。経済学部は2年連続の減である。文学部は2021年度から志願者の増減を繰り返しており、来年は増加の年にあたるため注意が必要だろう。外国語学部の志願者は前年比

109%と大きく増加した。昨年は学部全体の倍率が2.3倍までダウン、2倍未満の区分が25区分中9区分となった。なかでもインドネシア語専攻は1.0倍となるなど、競争緩和が目立っていた。今春は学部全体の倍率は2.6倍に上昇、2倍未満の区分も5区分に減った。

理系学部の志願者は理学部で増加、工学部は前年並み、基礎工学部で減少した。基礎工学部は近年極端な隔年現象を起こしており、直近の3年間をみても志願者前年比は82%→130%→75%と推移している。

医療系学部の志願者は医-医、歯学部で増加、医-保健、薬学部で減少した。医学科は昨年志願者が減少しており、今春は一昨年並みの志願者数に戻った。歯学部は3年ぶりの志願者増となった。保健学科では看護学専攻を除き志願者減となった。放射線技術科学専攻では2年連続の志願者減となったが、倍率は2.9倍と3専攻の中で最も高いことに変わらない。

〔神戸大学〕

前期日程の志願者数は前年比104%、3年ぶりに志願者が増加した。学部別にみると、文、法、経営、理、農、医学部などで志願者が増加した。経営学部は2年連続の志願者増であるが、他の学部は前年志願者が減少していた学部である。なかでも文学部では近年隔年現象が顕著で、直近5年の志願者前年比は121%→70%→158%→67%→133%で推移している。経済学部ではすべての区分で志願者が減少したが、なかでも「英数選抜」では志願者が昨年から半減した。

後期日程の志願者数は前年比101%となった。大学全体の志願者数にこの3年で大きな変化はない。学部別にみると、工、農、医、国際人間科学部で志願者増となった。また、文、法、理、海洋政策科学では志願者減となった。募集区分単位でみると、前年志願者が増加していた区分では減少、前年減少していた区分では志願者が増加といった動きが目につく。理学部の生物学科（志願者前年比67%）、惑星学科（同62%）など極端に減少した区分では、来春は志願者の大幅増が予想される。

〔九州大学〕

前期日程の志願者数は前年比101%となった。大学全体では直近の3年で志願者数の変化は小さい。学部別にみると、志願者が増加したのは、文、教育、芸術工、農、共創学部などである。芸術工学部の未来構想デザインコースでは昨年の3倍を超える志願者が集まった。倍率も2.0→7.1倍に上昇した。

志願者が減少したのは法、経済、理、工、歯、薬学部などである。薬学部では両学科とも志願者が減少、とくに臨床薬学科で志願者は約1割減少、倍率は3.3倍にダウンし、創薬科学科（2.4倍）との差は縮まった。

後期日程では、前年比110%と志願者が増加した。ただし、昨年大きく減少しており、一昨年の志願者数には及ばない。学部別には法、理、薬学部を除き、志願者は増加した。とくに増加率が高いのは文学部（志願者数317人）で、過去10年で最多となった。農学部では2年連続で前年から1割以上増加、倍率は一昨年の7.5倍から9.4倍まで上昇した。

大学別の国公立大の出願状況は河合塾入試情報サイトKei-Net（※）にて閲覧が可能となっているのでご活用いただきたい。
※Kei-Net国公立大出願状況：
<https://www.keinet.ne.jp/exam/entry/index.html>